

東方Project「評論・情報」シリーズ



幻想 評論 新刊 内

幻想論壇案内

——東方 Project 系「評論・情報」レビュー——

本文：後藤和智（後藤和智事務所 OffLine）

表紙イラスト：松田縞（stripe2）

注意事項

1. 本書は、サークル「上海アリス幻楽団」のゲーム「東方 Project」を原作とする二次創作作品であり、本書著者及びサークルは当該サークルとは一切関係がありません。また登場人物の口調、性格などが原作と異なる場合があります。
2. 本書は東方 Project の二次創作ガイドラインに基づき製作されているものであり、弊サークルの許可のない二次配信などを禁じます。
3. 本書は、2011年3月13日に発行された同人誌『幻想論壇案内——東方 Project 系「評論・情報」レビュー』（後藤和智事務所 OffLine）の第1章を再構成、一部修正したものです。電子書籍化にあたり、第2章を削除しています。
4. 本書の電子化にあたっては、原著の知見を重視するため、註釈などを除いては原則としてデータを更新しておりません。ご了承ください。
5. 電子版の表紙は、冊子版に寄稿していただいた、サークル「stripe2」の松田縞氏のイラストを引き続き使用しております。松田氏には、電子版にもイラストの利用許可をいただきましたことを、謹んでお礼申し上げます。

目次

1. はじめに	4
2. 作品評論系	7
2.1 星空亭『東方幻想言論』（2010年）.....	7
2.2 オタクブックス『評論東方』（2009年）.....	9
2.3 PARADOX『異形抄 幻想説話』（2005年）.....	11
2.4 津向屋『あいらさん& malto さんに聞いてみました』（2010年）.....	11
2.5 げんきゅー「東方見聞録～ Phantasm Interview.」.....	12
3. 舞台探訪系	14
3.1 かんたんのゆめ『東方を往く——全国の東方っぽいところ訪ね歩き 壱』（2010年）....	14
3.2 かんたんのゆめ「秘封るる部京都 スマートフォン版 test 公開」.....	16

3.3 日本ワルワル同盟『もりやけ ver1.5——諏訪聖地巡礼レポート』(2010年).....	17
4. イベントレポート系	17
4.1 STRIKE HOLE『コマニズム宣言 SPECIAL 東方論』『同 東方論 2』(いずれも2010年).....	17
5. 講座系	19
5.1 東証 Project『東方粉飾劇——粉飾決算を華麗にグレイズ!?!』(2010年).....	19
5.2 ほらもるふいずむ『東方数学記.1 ~ユークリッドダウジング』.....	20
5.3 雷電[D-89]「阿求の本キライ!!!」シリーズ	21
5.4 ガガンボ「東方キノコ講座」シリーズ.....	22
5.5 素士「療法 Project」シリーズ.....	23
5.6 saku「萃香のお酒紹介コーナー」シリーズ	23
6. データ系	24
6.1 久幸繻文『東方コミュニティ白書 2010』(2010年).....	24
6.2 同人誌即売会検索しずむ『同人誌即売会検索しずむの分析本 番外編 3』(2010年) / Paradox Library『ニコニコ動画統計データハンドブック (冬)』(2010年) / ペっとぼとる『コミケの興亡』(2010年).....	26
7. まとめ	27

東方 Project 系
 「評論、情報」レポコー

1. はじめに

霧雨魔理沙 (以下、**魔理沙**) : えーと。「東方 Project 同人界隈の皆様、はじめまして。私は普段は評論系で同人活動をしております、後藤和智と申す者です。このたびは、当サークル 17 冊目の同人誌となります、『幻想論壇案内——東方 Project 「評論・情報」系レビュー』をお手にとってくださいまして、誠にありがとうございます」と。こんなんでいいのか？

アリス・マーガトロイド(以下、**アリス**): 筆者からのメッセージね。というわけで、改めまして。このたびは「後藤和智事務所 OffLine」の同人誌をお手にとってくださいまして誠にありがとうございます。挨拶は、本書の筆者に代わりまして、私、アリス・マーガトロイドと、

魔理沙 : 私、霧雨魔理沙が担当するぜ。

アリス : ところで、あまり著者のことをよく知らない人たちのために、まずは著者の紹介をお願いしたいのだけど。

魔理沙 : 著者の「後藤和智」は、「1984 年岩手県釜石市生まれ、宮城県仙台市出身。東北大学工学部建築学科卒業、同大学院工学研究科博士課程前期（都市・建築学専攻）修了。2004 年にブログ「後藤和智事務所——若者報道と社会」（現在、移転して「新・後藤和智事務所——若者報道から見た日本」に改称）を設立。2007 年の冬コミより同人サークル「後藤和智事務所 OffLine」でのサークル活動を始める。著書に『「ニート」って言うな！』（本田由紀、内藤朝雄との共著、光文社新書、2006 年）『おまえが若者を語るな！』（角川 One テーマ 21、2008 年）など。現在、雑誌「POSSE」にて、「検証・格差論」を連載中とのことだ。ちなみに「事務所」って名前は、単にノリでつけただけ、らしい。

アリス : 著者紹介を聞く限りでは、著者は社会学とか経済学とかの領域で活動している人、ってことでいいのかしら？

魔理沙 : どうかね。まあ、こんな分野に足を突っ込んでくるくらいだし、基本的に何でも屋気取りなんだろう。

アリス : それはともかくとして、本書はどういう本なの？

魔理沙 : 本書は、私たちが活躍する「東方 Project」シリーズに関する「評論・情報」系の記事や同人誌及びネット上のコンテンツを紹介し、著者なりの解釈を加えつつ、東方の評論や、東方を使ったノンフィクションの世界を読者の皆様にもっと深く知ってもらおう、という企画だ。

アリス : ありがと。もっとも、もともとの「評論・情報」系のジャンルって、筆者が以前にとあるイベント時に隣だったサークルの人が言ってたけど、基本的に「その他」と言っても過言ではないジャンルだから、いろいろなものがあるとおかしくないと思うけど。

魔理沙 : まあな。ただ、二次創作漫画・ゲームや楽曲アレンジがメインである東方の同人界隈の中で、ノンフィクションをはじめ「その他」に属する同人誌というのはあんまり多くないかもしれない。だが、例えば元ネタ探訪など、着実にひとつのジャンルとして、東方関係の「評論・情報」系という界隈が

確立しつつある、というのが筆者の見解だ。

アリス：本書ではどういふのを取り扱うつもりなの？

魔理沙：まずメジャーなものとして元ネタ探訪系。こういう表現をするのは、アニメやゲームなどの舞台探訪に対して用いられる「聖地巡礼」という言葉が筆者があまり好きではないということもあるが、実際に東方においては現実的に「舞台」と呼べるものは存在していないこともある。ただ元ネタとされているものは確実に存在しており、それを取り扱った同人誌もいくつか存在する。

アリス：サークルペーパーなんかで諏訪に行ってきました、ってことを書いているサークルもあるわ。諏訪六社の上社がある茅野には著者も行ってきたしね。

魔理沙：諏訪近辺は同人誌即売会が開かれるほど、東方のゆかりの地として定着している感があるな。さらに、諏訪のみならず、日本各地の様々な妖怪にまつわる伝承が東方の元ネタとなっているとされているので、そこに行ってみた、という同人誌もある。筆者は買う機会を逃したが、主に岩手県の遠野に行った写真集なんかもあったしな。

二つ目はイベントレポート系だ。今回は1サークル2冊分をとりあげるが、東方のオンリーイベントは全国津々浦々、さらに言えば外国でも開催されており、また当然だがイベントごとに性格も違えばどのような結末になったかも違う。

アリス：「博麗神社例大祭」なんかは今やビッグサイトの東館の半分以上を使用するイベントに成長しているし、大阪や仙台、札幌、新潟などといった主要都市で開催されるようになってきているわね。著者の参加していた「杜の奇跡16 & 東方杜郷想2」なんて、「杜の奇跡」サイドはほとんど過疎状態で、東方オンリーのほうがたくさん盛り上がっていたしね。

そしてその流れは地方にも波及し、各種イベントで配布されるチラシを見る限りでは、地方でオールジャンルのイベントが行われたら次は東方オンリー、もしくはオールジャンルと東方オンリーの共同開催というのも珍しくはないように見えるわ。他方で新しい東方系の即売会が開催されるたび、今度はここで開催されるか、とってしまうこともあるわね。まあ米原（注1）とか徳島（注2）とか鳥根（注3）とかくらいじゃもはやだれも驚かないでしょうけど。

魔理沙：比較的初期から開催していた即売会が、規模の拡大やそれに伴う会場の変更による混乱をなんとかして抑えたり、また全国から腕利きのスタッフを集めていたり、即売会のノウハウがない主催者を経験豊富な組織がサポートしていたり。他方で、即売会のことをまったく知らない主催者がとんでもない日程で開催したりとかいうのもあったらしいしな。

アリス：それほどまでに東方の同人というものの広がりや早いは早いと言えることができるかもしれないわね。他方で、即売会の主催者としてそれなりに経験のある団体が東方の即売会に名乗りをあげても、もう少し他のイベントとの差別化がはかられる必要があるのではないか、という即売会もあるけどね。

魔理沙：それは本編中に回すことにするぜ。次に作品評論系。東方の原作であるゲームもそうだが、それ以外にも東方には様々な二次創作作品があり、それらに対する評論もいくつかある。そして東方の知名度の高まりや二次創作の

注1 「まいばらこみゆにけつと 2010」内「まいこみ東方祭」。2010年9月19日。滋賀県立文化産業交流会館大ホール。詳しくは『コアミズム宣言 SPECIAL 東方論2』参照。
<http://www.taiga-s.co.jp/rhs/maicomi/>

注2 東方四国祭 3。平成23（2011）年5月29日。アスティとくしま3階特別会議室。
<http://mikantalto.jugem.jp/?eid=40>

注3 東方萃神祭。平成23（2011）

幻想論案内

年4月17日。くにびきメッセ（島根県立産業交流会館）。

<http://suishinnsai.ddo.jp/>

注4 <http://d.hatena.ne.jp/NATROM/20081216>

注5 <http://d.hatena.ne.jp/Mochimasa/20100214/1266167562>

注6 <http://transact.seesaa.net/article/142713383.html>

広がりが続いていく限り、それらに対する評論の流れの広がりも止まることはないだろう。

アリス：とはいえ、現状では東方に関する評論というジャンルは、少なくとも即売会という場ではあまり大きいとは言えないわね。もっとも、評論という行為が多様な読み方に支えられている以上、評論の世界が広がっていくことに期待もできるわね。

魔理沙：東方の評論でまとめた同人誌も存在し、そしてそれが本書を作成するきっかけとなっているので、それは是非とも紹介しておくこととする。そのほか、二次創作の作者に対するインタビューも紹介することにするぜ。

四つ目は東方のキャラクターを用いた講座系の作品だ。特定のキャラクターを用いた講座形式の作品というと、メジャーなのは「やる夫で学ぶ」シリーズ、ニコニコ動画では「アイマス教養講座」シリーズが挙げられるだろう。特に「やる夫で学ぶ」シリーズは、筆者の興味のあるニセ科学批判界限でも NATROM 氏（「やる夫で学ぶ脚気論争」注4）、Mochimasa 氏（「やる夫で学ぶホメオパシー」注5）、kumicit 氏（「やる夫で学ぶインテリジェント・デザイン」注6）といった有名どころがコンテンツを作成しているし、ニコニコ動画の「アイマス教養講座」タグがついている動画も相当数のものがある。

そんな中、東方のキャラクターを用いた講座系のコンテンツも最近出始めている。当初はニコニコ動画の影響で新たに東方を知る人が増えた中、東方がどのようなものであるかを紹介するような動画があったが、現在は自然科学や経済学などの分野でいくつか作品が出てきはじめているし、今後も増えていく可能性は大いにあるだろう。

アリス：本書もそうだけど、既存のキャラクターを用いた講座系のコンテンツの長所は、素材となるキャラクターの立ち位置や性格などがはっきりしているから、その分話が組み立てやすいということなのよね。もちろん二次創作という制約はあるけど。

魔理沙：そして最後はデータ系だ。これについては、1冊極めて優れた同人誌があるから、それを紹介したい。「東方 Project」という作品体系や同人誌の世界の広がりとは並大抵のものではないから、それを紹介しておくぜ。

また、東方というジャンルの枠組みからは外れてしまうが、「評論・情報」系のジャンルでは、例えばニコニコ動画のタグの数やあるいは即売会の登録サークル数などをまとめて同人誌にしているサークルがあり、そこもまた東方というジャンルに対して注目している。本書ではそこも取り扱うつもりだぜ。

アリス：確かにものの流行を見る上でデータは必須よね。イベントの開催数や、あるいはコミケなどの大規模なイベントでのサークル数なんかも、特定のジャンルの動向を見る上では重要だし、特に東方みたいな成長著しいジャンルでは、そのようなものの動向にも注意を払っていく必要があるわね。

魔理沙：本章で紹介するジャンルは以上だ。

このように、これはあくまで筆者の見解だが、東方を取り扱った「評論・情報」系の同人誌の世界は、舞台探訪系や講座系なども含めて、これから伸びる余地は十分にある。また、ここでお断りしておくが、本書で取り扱って

いるものは、特に同人誌については平成 22 (2010) 年周辺のものがほとんどであり、それ以前のものについては捕捉しきれていないということも言っておかなければいけない。ともかく、本書が「東方 Project」をめぐる「評論・情報」の世界に注目してくれるきっかけとして役に立ってくれたら光栄だ、と筆者は述べている。

最後に、本書のルールについて説明する。本書は基本的に私とアリスとの仮想対談という形式でまとめられている。

あと、特に口調とかについてイメージと違うところがあるかもしれないが、まあ、そこは大目に見て欲しい。また、私もアリスも基本的に筆者の見解に近い立場の発言をしている。また、現実世界についての知識がかなりあるように見えるかもしれないが、そこも大目に見てほしい。

最後に。まあこのような本を手にとるような方々には説明は不要かもしれないが、本書を読む上での最低限の知識として、東方 Project に出てくるキャラクターの名前と容姿、そして所属や主な行動くらいは知っておくこと。

アリス：読者の皆様に注意を喚起すべき情報はこのくらいかしらね。

魔理沙：それでは、皆様を東方の「評論・情報」系の世界にご案内するぜ。

2. 作品評論系

2.1 星空亭『東方幻想言論』(2010年)

魔理沙：本書成立のきっかけとして、是非とも語らなければいけないのが本書だな。本書は東方 Project という作品から二次創作に至るまでの評論の王道であり、原作やそれにおけるスタンス、そして音楽はもちろんのこと、東方同人の世界や、逆に東方 Project というムーブメントを知ることによって同人の世界に入ってくる人たち、そして東方の二次創作をめぐる状況まで含めて射程に収めてしまっているという、まさに現段階で最高の東方評論と言ってもいいくらいだ。

そして筆者もこの本に触れることによって、「東方に関する「評論・情報」系同人コンテンツの紹介」というインスピレーションを得た。クオリティについては本書は同書のレベルに到達しているかは疑問だが、東方評論の世界を担う一人として、まずは同書に敬意を表したい、と本書の筆者が言った。

アリス：ところで、同書の見所は二つあるわね。第一に、冒頭の赤りんご (az)、風見ニノ (オタクブックス)、増田 (OTAD) の各氏の鼎談である「東方×デザイン×同人」。ちなみにこの座談会に参加している OTAD の同人誌は筆者もお気に入りみたいね。

魔理沙：この鼎談は東方の原作や個々の二次創作物に対する作品論というよりは、東方を素材としたデザインに関する座談会であり、同人の世界に入り込

幻想言論壇案内

注7 漫画家。同人サークル「ダイオキシン」代表。主な作品に『はるみねーしょん』『ひらめきはつめちゃん』。独特のキャラクター造形と言葉遊び風のネタ、わかりやすい構図に定評があり、特に氏の描くチルノは「大沖チルノ」としてチルノ関係の二次創作の一つのスタンダードになっている。

注8 <http://www.nicovideo.jp/watch/nm3931214>

んでいる人、これから入りたい人、そして東方を媒介として同人の世界に触れた人なら是非とも読んでおきたいといったところかな。特に東方というのは同人の世界においては決して小さくないジャンルであり、またニコニコ動画などでの人気も相俟って、基本的に同人活動だけで成立している東方というジャンルから同人の世界に入る人も多いようだ。

例えば同書 p.10 の風見氏の発言で、このような興味深いことが書かれている。

新しいファン層が入って来ているのもありますね。今までオタク文化に興味の無かった、例えばデザインが好きな方や美大生の人が東方に興味を持って作品を作ると、それは自ずとかなりクオリティの高い物になる。既存のオタク文化とは掛け合わなかった、見なかったような新しいデザインやイラストなりが多く見受けられるようになったと思います。（『東方幻想言論』 p.10）

アリス：もしこれが正しいなら、是非とも彼らの作品を見てみたいものね。これは別に皮肉とか嫌みとかでいっているのではなく、東方という作品を媒介として、新たなデザインの形が生み出されているというのは実に興味深いわ。それは東方というジャンルそれ自体の持つ懐の深さであり、そして東方というジャンルの活躍の広さの証明でもあるのかしらね。

この直後には赤りんご氏によるこういう発言もあるわね。

主に東方の同人の中で、正しく文字を置く、綺麗に文字を置くという意識から総合のプロダクトデザインに少しずつ意識が向いて言っていますね。完成度の高いものをどうやって作っていくか、そういったデザインが徐々に広がっている風潮はあるかもしれません。（『東方幻想言論』 pp.10-11）

魔理沙：全体のデザインの動向についてはひとまずおくとしても、例えば同書 pp.11-12 で高く評価されている大沖（注7）氏の作品に対する評価や東方のキャラクターの特徴が主に頭部に集中していることに対する評価などがある。とはいえこの座談会は基本的にデザイン論であるから、その点に注意して読む必要があるかもしれないが。

次に同書の大部分を占めるのは、東方二次創作関係の紹介だな。そしてそれが第二の見所だ。pp.18-33 がその部分にあたる。この章においては2009年の作品を中心に、ギャグからシリアスまで様々な東方の二次創作を採り上げている。本書で取り扱っている「評論・情報」系の作品に対しては、次節で採り上げる「かんたんのゆめ」の『秘封る部』という旅行誌仕立ての同人誌が「一風変わった二次創作」として紹介されている。他にもニコニコ動画の作品として「モグモグフヨード」の「東方ボスラッシュ」（注8）や、ネット発祥の「釣り」作品である「東方地霊殿 Phantasm」なども採り上げられており、東方の二次創作の流れを大づかみしたり、あるいはその上で読むべ

き同人誌、見るべきコンテンツを知る上では重要なものとなっている。

アリス：「この東方同人がすごい！」とかいう、どこかで聞いたようなタイトルになっているけど、風神録の前史を描いた作品である「いよかん。」(注9)の『かぜなきし(上)』とか、キャラクターの「老い」を描いた「ヘルメットが直せません」(注10)の『八月の風露草のようにありふれた、小道具店店主と普通の魔法使いの日常譚(あるいは道理の枝)』など、決してゲームでは語られない領域に挑んだ作品や、作品には登場しない幻想郷の人物の交際を描いた作品など、他の原作の二次創作ではもしかしたらバッシングを受けかねないような作品まで受容されているのが、東方Projectという体系のすごいところであるのかもしれないわね。

あと pp.36-39 の酔狂氏によるコラム、「東方という宗教」について本書の著者がちょっと笑わせてもらったとか言ってたので突っ込みさせて頂戴。筆者は東方を宗教に譬える理由について、一次情報の少ないことより総体が不明だったり多数の「宗派」が存在していること、さらにそれがキャラクター単位にまで細分化されていることなどを挙げているわね。あとはこんなの。

新規参入者による文化が影響力を増し、既存の文化の産物が、界限全体の共通認識ではなくなっていったのです。異文化と触れ、文化の融合が起こることは決して悪いことではありませんが、それまで村社会として一体感を感じていた人々にとって、あるいは受け入れがたいと思っていた人も少なくなかったのかもしれない。そして、そういった変化に対する防御的な姿勢こそが東方の閉鎖性の正体であり、宗教的な要素であると言っていいのではないのでしょうか。(酔狂「東方という宗教」、『東方幻想言論』p.39)

アリス：さすがにそれは悲観的に過ぎると思うわ。むしろ、東方は「宗教」と言うよりはむしろ「神学」的であると言ったほうが近い気もするわね。

2.2 オタクブックス『評論東方』(2009年)

アリス：筆者が最初買った東方の評論系の本がこれね。

魔理沙：『東方幻想言論』とは違い、こちらは東方という同人ジャンルの制作に関わっている者から見た東方同人界限の解説書という形をとっている。

第1章は基本的に自分が東方Projectという作品体系に興味を持った経緯が書かれている。東方の二次創作に関わるようになったのは、同人サークル「IOSYS」からCDのデザインを頼まれたことがきっかけのようだが、その頃はまだ東方のことはあまりよく知らなかったらしい。著者はこの章では東方というものがほかの作品、著者が挙げているのが「かんなぎ」(注11)だが、それと比較して「入り口」というものの違いについて論じている。

ここで話を東方に戻すが、当然東方は公式にアニメ化されてはいないの

注9 <http://hotaiyokan.blog86.fc2.com/>

注10 <http://oide.spur.cx/>

注11 武梨えりによる漫画作品。月刊誌「REX」(一迅社)に連載されていたが、著者の都合により2009～2011年に休